

2月の定例研究会は、原合名会社の奥帳場主事であった大河原與三郎のお孫さんの大河原英與様と、原合名会社庶務部に所属し原富太郎の私設秘書を務めた鈴木政次の娘さんの根岸五百子様をお招きしてお話を伺いました。

大河原英與様 「^{たな}お店と孫の私」



大河原英與様は文藝春秋に勤め長く芥川賞・直木賞の選考に携わられました。昭和6年生まれなので、昭和5年に没した與三郎と会ったことはないそうですが、その生い立ちや家族のこと、原富太郎との関係について、資料を交えながらお話をくださいました。

與三郎は明治7年に小島淺次郎の次男として生まれ、成績優秀でしたが小学校を出た後は進学せずに働き始め、明治22年に亀屋（原善三郎の商店）に入店しました。富太郎が善三郎の孫の屋寿と結婚して原家に入ったのは明治24年。與三郎は明治30年に大河原アイと結婚して大河原姓となりました。明治33年には「お店（たな）」が原商店から原合名会社へと改組されます。大卒の人材が採用されるような学歴社会の始

まりの頃でしたが、與三郎は明治37年より奥帳場主事を任され、富太郎にかわいがられたようです。與三郎は書画骨董が好きで、図書館のように文学書を多数所蔵し、子供たちにも教養を身につけさせました。56歳で亡くなったとき、毛利元就の三本の矢の話を遺訓としたそうです。

根岸五百子様 「^{まさし}父・鈴木政次の話」



根岸五百子様は鈴木政次の長女として横浜に生まれ、小学5年生で埼玉に疎開の後、現在は群馬県にお住まいです。

鈴木政次は明治41年横浜に生まれ、大正12年の関東大震災のときは16歳で横浜市役所に勤めながら夜学に通っていました。横浜市復興会の仕事で富太郎と知り合い、その後富太郎に声をかけられて原合名会社の庶務部、製糸部に所属しました。お持ちいただいた「富岡製絲場工女勉強之図」は、明治6年の錦絵を原が大正15年に再版して従業員に配布したものと思わ

れます。昭和20年、鈴木政次は昭和林業株式会社の横浜支店に移ります。『原三溪翁伝』に登場する人物のうち、その昭和林業の関係者である横山秀、宮田鉄五郎、小川専太郎に根岸様は会ったことがあるそうです。昭和7、8年頃の原合名会社のクリスマス会の写真にある鈴木政次の仮装姿が印象的でした。